

言語資源としての呼称の持つ意味： 恋愛小説を例として

佐藤 響子

1. はじめに

人が人とことばを交わす時、お互いの関係性について何らかの情報の伝達が行われる。それは、どのような単語を使うのか、どのような構文を使うのか、敬語を使うのか使わないのか、といったさまざまな言語手段を使って行われる。選択の連続を通じて行われる行為である。相手をどのように呼ぶのかという名前の選択もその一つである。本稿では、2000年代に発表された恋愛小説に描かれている相手に呼びかけるときに使われる名前の選択を切り口にして、恋愛小説に描かれている親密な人間関係の紡ぎ方を考察する。

恋愛小説を言語学的な視点で分析したShibamoto-Smith (1999, 2004)の問題意識は、どのような表現を使って異性愛の欲望や愛を伝えあうのか、そのためにどのような言語モデル・言語資源が私たちに提供されているのかをあぶり出すことであった。本稿の問題意識も同じところにある。しかしながら、Shibamoto-Smithの分析がtrue loveあるいはtrue loverというものが恋愛小説のテーマとして存在していることを前提として論を進めていることに違和感を覚えるというのが本稿の出発点である。けしてShibamoto-Smithの前提が間違っていると言いたいのではない。Shibamoto-Smithが1970年代から1995年までの小説を考察対象としているのにたいして、本稿が分析対象とする小説が2000年代の作品であることが違和感の原因ではないかと考える。

Eckert and McConnell-Ginet (2003: 31-2) は次のような特徴がジェンダーにあると述べている。

Gender is learned

Gender is collaborative

Gender is not something we have, but something we do

同様のことが恋愛についてもあてはまる。何を恋愛感情と名付けるのかに始まり、何をどのように表現すべきなのか、どのような表現を差し控えるべきなのか、どのような行動が許されてどのような行動が許されないのかといったことは社会や文化そして時代によってさまざまな制約と選択の幅が用意されている (Giddens 1992; ノッター 2007)。それらを私たちは社会化のプロセスの中で学習する。そして、恋愛も自身と他者との関係性の中で生じ、自身と他者との相互作用の中で展開するという意味で協力的な作業である。ということは、恋愛というものも決して自然発生的にそこに存在するものではなく、ある社会、文化、時代の中で学んだことを実践する行為だといえる。

つまり、Shibamoto-Smith (1999, 2004) に違和感を抱くことこそが恋愛感情というものが普遍的な感情ではなく、谷本 (2008: 15) が「どのような感情を恋愛と名づけるかは社会によって規定されている」と述べているように社会や時代によって変化しうるものであることを示しているのではないかと考える。

私たちが使っていることばは無色透明なものではない。話し相手をどのように呼ぶのかということにもさまざまなイデオロギーが反映する。イデオロギーとは何が良いことで何が悪いことなのか、何が正しいことで何が間違ったことなのか、何が正常なことで何が異常なことなのか、といった私たちが持っている信念の総体である。同じ社会、同じ文化、同じ時代を生きている人々が共有する世界観、あるいは解釈の枠組みといってもよい (Verschueren 2012)。いったんある世界観を持つと、その世界観が現実を見る眼に制限をかけ、その世界観と合致しない考え方や人を排除する力を持つ。本稿では、恋愛小説に描かれている名前の持

つ意味を媒介として、2000年代的恋愛関係の紡ぎ方を明らかにしてきた
い。

本稿は以下のような構成となっている。第2章で恋愛言説の変化をた
どり本稿の意義を確認する。第3章ではそもそも恋愛小説とはどのよう
なものであるのか、言語学的な視点からどのような研究が行われてきた
のかを概観する。第4章では考察対象となる作品を紹介する。第5章か
ら第7章を分析にあてる。第5章では名前のない恋愛と名前が不安定な
恋愛模様を紹介する。第6章では第5章で紹介したような恋愛が形式を
重視するさまを告白の儀式的性と下の名前を呼ぶことの意味という観点か
ら考察する。第7章では親密な関係性を築こうとするとときに名前がど
のような意味を持つのかを考察する。そして第8章をまとめにあてる。

2. 変遷する恋愛言説

他者と紡ぐ関係性の一形態である恋愛への関心は高い。上野（1998）
は、近代人は「恋愛病」にかかっているという。血縁や地縁といった人
と人とのつながりではなく、選択的に他の誰かとつながることを人々が
求めてやまないのだという。

前述のとおり、恋愛は社会的実践である。よしんば、恋とはどうし
うもなく陥ってしまう感情の動きだとしても、その感情をどのように表
明するのかどのように表明してはいけないのかという行動の参照枠とな
る縛りがその時々々の社会・文化の中に存在する。さもないと、恋愛の
形が時代を経て変化するはずがなく、Giddens（1992）による
transformation of intimacy（親密性の変容）といった論考が出現し注目さ
れるはずもない。草柳（2004: 160）が「われわれは自分自身が社会化
される環境において『恋愛』を学ぶ」と述べているように、社会化のプ
ロセスを通じて当該社会で流布している恋愛にかんする考え方に接し、
いかに身を処したらよいのかを習得していく。どのような気持ちが恋愛
感情であるのか、どのような行動をするのが恋人同士としてふさわしい

のか、恋愛と恋愛でないものとの違いは何か、適切な恋愛と不適切な恋愛の線引きはどこで行うのか。こういった事柄に対して、私たちは当該社会の中で作法を身につけていく。

恋愛作法を身につけるのに大きな影響力を及ぼすのがメディア情報であることは論をまたないであろう。小説、マンガ、雑誌、映画、テレビ、音楽等あらゆるメディア媒体に恋愛にかんする言説があふれている。

たとえば、ポピュラー音楽にも恋愛をテーマとした歌詞が多い。森永(1997)によれば、流行歌の歌詞の中に「恋・愛・ラブ」を含まないものはほとんど存在しないという。「オンリーユー・フォーエヴァー」を意味する歌詞に限ってみても、1960年代からその数が増え続け、1990年代には歌詞の半数に「オンリーユー・フォーエヴァー」を読み取ることができるということである。

マンガや小説も恋愛を扱ったものが多い。そこに描かれている恋愛模様は時代とともに変化している。草柳(2004)は、1970年代の作品と1990年代の作品を比較し、恋愛の形が結婚との親和性の高い「強い恋愛」から親和性の低い「緩やかな恋愛」へと変化していると論じている。

強い恋愛とは「個人を他の個人に強く排他的に」(草柳 2004: 164) 結びつけるような関係性であり、「唯一無二の異性との関係性のうちに全存在が完結している」(草柳 2004: 169) 恋愛のあり方である。1970年代に人気を博したマンガを例として、「女性は一人の異性にすべてを捧げる、それが女性にとっての恋愛であり幸福である、まさしくそのようなものとして『恋愛』が描かれている」(草柳 2004: 170) と分析している。1970年代のマンガを分析した谷本(2008)も同様の結論に至っている。恋愛は結婚と結びつくものであり、一生涯唯一人の人を愛する非常に真面目なものとして描かれているということである。

一方、1990年代の「緩やかな恋愛」とは、相手とのかかわり方は部分的であり、「一人の恋人に自己の存在証明を委ねる」(草柳 2004: 178) ことのない恋愛である。したがって、「恋愛関係の成就のような事柄は、

物語を終結させるに足る出来事」(草柳 2004: 173) とはなりにくい。人々は多様なネットワークの中で生きている。そのネットワークの中での恋人との関係性は、周囲の他の人との関係性と同じく等しく遠い、というのが緩やかな恋愛である。

谷本 (2008) は、現代の恋愛は「二人自閉」の関係性であるという。恋人としての重要な要素は感覚の類似性であり、感覚の似たもの同士が閉じた世界の中で結末を先送りしながら曖昧で不確定な関係性を続ける遊戯性が見出されるとしている。

森永 (1997) のオンリーユー・フォーエヴァーの思想も草柳 (2004) の「強い恋愛」も、恋愛と結婚の対立関係を解消して恋愛を結婚という制度の中に組み込んだロマンティック・ラブ・イデオロギーの反映といえよう。そして、草柳 (2004) の「緩やかな恋愛」にしても、草柳と表現こそ違いますが谷本 (2008) の主張する結論を先送りにした「二人自閉」の世界を築く関係性にしても、そこからの親密な関係性の変容を示しているであろう。

社会の中に流布している恋愛言説が私たちに及ぼす影響は計り知れない (草柳 2004, 2011; 谷本 2008)。流布する言説そのものも社会のありようを反映している。流布する言説はことばを媒介とする。よってことばの詳細な検討によって流布する言説と社会のありようや変化を捉えることができる。もちろん、ことばが現実を直接反映するわけでもなければ、ことばが社会の現実を直接形作っているわけでもない (Fairclough 1992)。ただし、私たちは無の状態からものを考えたりことばを紡ぎ出したりすることはできない。どこかで使われていたことばを直接的あるいは間接的に引用したり、状況に合わせてその形を変えたりしつつ、自分のものとして使っていく。したがって、恋愛小説という多くの人が消費するメディアの中に何がどのように描かれているのかという微視的な検討をすることによって、私たちが現在利用可能な恋愛にかんするイデオロギー、つまり恋愛というものについて考えたり理解したりするとき

に利用可能な資源や規範的な考え方をあぶり出すことが可能となる。

3. ロマンズ小説と恋愛小説¹

恋愛小説の代名詞といえば「ハーレクイン・ロマンス」であろう。どの小説もみな同じと揶揄されながらも多くの読者をひきつけるロマンス小説を読む理由を、Radway (1991) は日常からの逃避 (escape) であると分析している。安全で心地よいソファに座って危険な恋愛を体験したり恋愛の苦悩を味わったり、あるいは、自身の置かれている状況と重ね合わせて自己確認を行ったりするという形で恋愛小説が消費されている。本章ではまず恋愛小説の代名詞「ハーレクイン・ロマンス」とはどのようなものであるのかということを確認し、次に「ハーレクイン・ロマンス」のあり方とは異なる日本の恋愛小説の現状を概観する。そして最後に言語学的な視点から日本の恋愛小説を分析した研究を紹介する。

3. 1. ハーレクイン・ロマンス

尾崎 (2008a, 2008b) がその系譜を辿っているように、カナダで創刊しアメリカで人気を博したハーレクイン・ロマンスは、その起源をイギリスに持つ。イギリスのMills & Boon社が必ず売れるロマンスの公式として打ち出したプロットをカナダのHarlequin社が採用し、1960年代からアメリカでの販売を開始した。1970年代に入ってからアメリカで大ブームを巻き起こした。そのプロットとは、尾崎 (2008a) によると、絶世の美女とは言い難いが性格の良さからくる魅力を備えた女性が大金持ちの男性の目にとまり、両者が喧嘩をしつつも相互の理解を深めて最終的に男性が女性に求婚するに至る、というものである。現在のHarlequin社の執筆ガイドラインには以下のような記述がある²。

¹ ハーレクインタイプの小説は、英語ではromance novelsと表記されている。3.1.で示すように一定の形式を備えた一つのジャンルが確立している。一方、3.2.で示すように日本の恋愛小説はハーレクインに匹敵する確立したジャンルとはなっていない。よって両者を区別するために前者をロマンス小説、後者を恋愛小説、という表記を使って区別する。

² Harlequin社のWriting Guidelineより。

Most important is a focus on romance and a clear sense of romantic conflict between the hero and the heroine. There must be realistic obstacles that keep them apart, and overcoming these obstacles is what leads them to a happily ever after.

恋愛を中心に物語が展開し、ヒーローとヒロインの間に両者を分かつような現実的な障害が存在し、それを乗り越えることによって幸せをつかむ物語ということである。

アメリカには会員数が一万人を超える組織 Romance Writers of America というものがある。1981年に発足したこの組織では以下に示すような定義をロマンス小説に与えている³。

A Central Love Story: The main plot centers around two individuals falling in love and struggling to make the relationship work. A writer can include as many subplots as he/she wants as long as the love story is the main focus of the novel.

An Emotionally-Satisfying and Optimistic Ending: In a romance, the lovers who risk and struggle for each other and their relationship are rewarded with emotional justice and unconditional love.

恋愛を中心軸とする物語であることと感情的な満足感を持った楽観的な結末があること、という二つの要素があるのがロマンス小説だということになる。

3. 2. 日本の恋愛小説

一定の形式を備えたロマンス小説というジャンルが確立しているアメ

³ Romance Writers of Americaのホームページより。

リカとは異なり、そもそも日本では、ハーレクイン・ロマンスに相当するような独自の文学ジャンルは確立していない。真銅（2007）も小説のジャンルについて論じる中で、「恋愛小説」という漠然としたくくりの存在を認めつつも明確な定義があるわけではないと述べている。内容に即して小説の多様性を捉える試みがなされているが、いずれにしても「後発的な命名であり、または文学史家による整理の命名にすぎない」（真銅 2007: 116）ということであり、ジャンルの境界線はあいまいである。

日本の恋愛小説には共通するプロットがあるわけでもない。マイカルス・アダチ（2010）は、日本の恋愛小説のプロットを調査した結果、アメリカのロマンス小説で要求されているような楽観的な結末がない場合が多いことを指摘している。

そうはいつても、近年になって恋愛小説が注目されていることも事実である。マイカルス・アダチ（2010）も指摘するように、恋愛を扱った小説に芥川賞や直木賞といった文学賞が与えられたり、恋愛小説を対象とした文学賞があいついで設立されたりしている⁴。

さらには、メディアで恋愛小説を一つのジャンルとして扱う事例が散見される。一例をあげれば、新刊や話題の本やコミックを紹介する書籍情報誌『ダ・ヴィンチ』はジャンル別に作品を紹介する場合「恋愛小説」というジャンルを設け、毎年恋愛小説の人気ランキングを発表している。

3. 3. 恋愛小説の分析

恋愛小説を言語学的な視点で分析したものには、Talbot（1995, 1997）やShibamoto-Smith（1999, 2004）がある。

Talbot（1995, 1997）はHalliday（1985）のprocess typesという概念を使ってジャンルとして確立されているロマンス小説の分析を行ってい

⁴ たとえば「島清（しませ）恋愛文学賞」や「日本ラブストーリー大賞」。前者は石川県白山市が同市出身の島田清次郎にちなんで1994年に制定した賞。後者は出版社宝島社による賞。2005年が初回の大賞授与年となっている。

る。その結果、ロマンス小説には女性が異性愛マーケットで期待されるジェンダー・アイデンティティから外れることなく振る舞えるようにする教育的価値が盛り込まれていると論じている。

Shibamoto-Smith (1999) は、true loveが日本の恋愛小説でどのように表現されているのかをHarlequin社の小説と比較している。Shibamoto-Smithがtrue love の概念として参照したのはKövecses (1988) による分析である。Kövecses (1988) は英語話者が使用している愛にかんする表現を調査し、“the conceptual model of love” を導きだしている。Shibamoto-Smithはその概念の中から二つの概念に注目して分析を行っている。ひとつは、愛とは思いの強さというスケールの限界点を超えるものであるということ、もうひとつは、愛とは身体が熱くなる鼓動が速くなるなどといった生理的反応を経験するものである、という概念である。Shibamoto-Smithが分析した1971年から1995年の日本の恋愛小説では、ハーレクイン・ロマンスに比べると、恋愛当事者たちによるお互いにたいする湧き上がる感情の描写が少ない。恋愛成就にとって重要視されるのは“an appropriate container” (Shibamoto-Smith 1999: 138) である。自分は相手にとってふさわしいのか、相手は自分や自分の家族にとってふさわしいのかということが物語の焦点になるという。また、生理反応にかんする描写は極端に少なく、それは感情を統制できることが成熟の証であるという考え方と関連しているのだらうと論じている。

唯一無二の相手との恋愛を成就させることがtrue loveであるとしたら、その愛を成就させるために何を重要視するのか、あるいは何をどのように表現するのかということにロマンス小説と日本の恋愛小説の間に相違があることがShibamoto-Smithの分析から浮き彫りになってくる。

4. 取り上げる作品

本稿で取り上げる作品は以下のとおりである。2000年代に入ってから出版された二十歳代前後の登場人物の恋愛を物語の中心とする小説で、二十歳代の作家によるものである。

金原ひとみ 『星へ落ちる』⁵

島本理生 『ナラタージュ』⁶

綿矢りさ 『勝手にふるえてろ』⁷

上記の作品の比較対照として、Shibamoto-Smith (1999) でも分析対象となっていた平岩弓枝による以下の作品を取り上げる。

平岩弓枝 『花嫁の日』

5. 名前のない恋愛

2000年代の恋愛小説には、以下に示すように、名前が与えられていない登場人物が存在している。

(1) 名前のない恋愛：綿矢りさ 『勝手にふるえてろ』

でも私はイチがよかった。ニなんていない、イチが欲しかった。

(p.5)

『勝手にふるえてろ』では、主人公の「私」と「私」の恋愛対象となる二人の男性が登場する。主人公は、その一人を「イチ」、もう一人を「ニ」と表現している。「イチ」は一宮君のニックネームの「イチ」に由

⁵ 2004年に『蛇にピアス』で芥川賞を受賞した金原ひとみによる作品。『ダ・ヴィンチ』Book of the Year 2009 恋愛小説ランキングで18位。

⁶ 『2006年版この恋愛小説がすごい』で1位になった作品。

⁷ 2004年に『インストール』で芥川賞を受賞した綿矢りさによる作品。『ダ・ヴィンチ』Book of the Year 2010 恋愛小説ランキングで2位。

来しているようであるが、もう一人を「二」と称するのは本名と何ら関係がない。二番手の位置づけとしての「二」である。このことは次の描写からもしっかりとわかる。

(2) 名前のない恋愛：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

私には彼氏が二人いて、どうせこんな状況は長く続かないから存分に楽しむつもりだった。もともとイチ彼は私の最愛だけれどとうてい添いとげられそうになく彼がおびえがちに微笑むのを私が見ていただけの関係で、二彼は私が彼をまったく愛していないにもかかわらず、私が将来結婚するかもしれない相手だ。(p.7)

主人公の「私」にとって望ましい相手は「イチ彼」、それにたいして、愛してはいないが結婚するかもしれない相手は「二彼」と表現されている。

『星へ落ちる』でも主人公「私」にまつわる男性が複数登場するが、名前が与えられている人物はいない。主な登場人物の一人である元同棲相手は「男」と表現されている。

(3) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

男が二十分後に掛け直すと言っていたのを思い出して、時計を確認する。(p.23)

現在付き合っている男性は以下に示すように「彼」と表現されているだけで、こちらも名前が与えられていない。

(4) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

夜の十時を過ぎた頃、メールを入れようかどうか、迷い始めた。彼には彼の事情がある。(p.37)

元同棲相手の「男」と現在付き合っている「彼」が同時に登場すると以下ようになる。

(5) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

電話の男は、よく私を思って泣くと言う。私も彼を思って、よく泣く。(p.26)

「男」と「彼」は同一人物ではない。ここで「彼」は言われているのは、文頭に登場する元同棲相手の「男」ではなく、現在付き合っている男性である「彼」のことである。「彼」は前方照応の代名詞として使われているのではない。

McConnell-Ginet (2003) が指摘するように、どのように相互に呼び合うかについてはいくつかの選択肢が階層をなして私たちに提供されている。たとえば、英語圏では、正式な名前 (Christopher) で呼び合うよりも名前を短縮した形 (Chris) で呼び合う方が双方の距離感が近いことを示している。さらに、名前にちなんだニックネーム (Crisco) を用いるほうが双方の距離感が一層近いことを示している。

佐藤 (2010, 2011) でも、親子や恋人といった親密な関係性において、双方をどのように呼び表すのかは話者の立ち位置と相手との距離感を示す指標になりえると論じている。

とくに、佐藤 (2010: 110-112) では、男女が付き合い始め、親密性が増すにつれて双方の呼び方に生じる変化とそれにまつわる言説に焦点を当てて考察を行っている。McConnell-Ginet (2003) の指摘同様に、日本語でも相互にどのように呼び合うかには暗黙裡の階層がある。その階層性を私たちは内面化し、規範化する。そして、ときにはその規範を明言し、相手にたいしてある呼び方をすることの是非を問う。以下に例を示す。

(6) 名前に不安のある恋愛：島本理生『ナラタージュ』

「その呼び方、もうやめろよ。三ヵ月付き合ってた小野君はないだろう。本当は俺のことなんか好きじゃないくせに困ったときだけ俺に頼るなよ」(p.324)

三ヵ月間付き合った相手を「小野君」と呼ぶことは適切ではないし、さらに「小野君」という呼び方をするような人は自分にたいして愛情を持っていないのだと明言できることが示されている。つまり、相手をどのように呼び表すのかと相手にどのような感情を抱いているのかには関係性があることを暗黙裡に前提にした発言である。

どのような呼び方を選択するかに絶対的な規則があるわけではない。何を選択するのは当該の実践のコミュニティ (Community of Practice) ごとに異なる可能性がある。McConnell-Ginet (2003: 80) は、知人たちから名前を短縮した形 (Chris) で呼ばれている人が配偶者など親密な関係にある人からは通常はもっと遠い関係の人たちが使用するはずの正式な名前 (Christopher) で呼ばれている例を紹介し、他の人が呼ばない呼び方をすることがカップルの特別さを示す指標となりえると論じている。

上記『ナラタージュ』の場合、「小野君」と呼ばれることだけで愛情の深さに疑問を抱いているわけではないだろう。しかし、このような発言ができるということは、どのように呼ばれるのかということが愛情の深さに大きく関与していて、特定の呼び方をされたら怒りを表わしてもよい、そのような指標が存在していることを示している。

相手をどのように呼ぶか、自分をどのように称するのかというのは、他者と自己の位置付けに深くかかわる言語行為だといえる (鈴木 1973)。多くの選択肢の中から双方の関係性を推し量りながら選択しなければならない。必ずしも、名前で呼んでいないから、ニックネームを使っていないから、といってそのような関係性を恋人同士とは呼ばない、という

わけではない。ただ、このように名前を出さない関係性、名前が不安定な関係性が紡ぎ出す実践のあり方と名前のある関係性が紡ぎ出す実践のあり方とにはなんらかの相違が生じてくるのではないかと考える。つまり、人と人との関係性において、相手をどうのよに呼び表すのかということが関係性に制限を加えたり方向づけたりする指標とするのではないだろうか。次章では、名前の影響力ということを念頭におきつつ、2000年代の恋愛小説にみられる形式の重要性という特徴を考察していく。

6. 形式を重んじる恋愛

2000年代の恋愛小説の中には、二人の関係性についてことばで明確に確認する場面がたびたび登場する。その一つが告白という言語行為である。1970年代とは告白という言語行為の持つ意味合いが異なっているように思われる。本章では、1970年代の告白と比べながら、2000年代の告白がどのように行われるべきものであると認識されているのか、それはどうしてなのかを考察していく。

6. 1. 告白という儀式

親密な関係性を築く第一歩である告白場面をみていく。すでに継続中の関係性を描いているために告白場面のない『星へ落ちる』をのぞく三作品をみていくことにする。

そもそも告白とはどのような言語行為なのだろうか。広辞苑では「心の中に思っていたことや隠していたことをうちあけること。また、そのことば」と定義されているが、恋愛小説の中ではどのように描かれているのだろうか。

以下に示すのは、『勝手にふるえてろ』の告白場面である。告白というものが予期可能な言語行為であることがうかがえる。

(7) 恋愛のプロセスとしての告白：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』⁸

カラオケ屋を出たあとも牛丼屋と一晩じゅう二に連れ回されて、そのあいだ彼はずっとなにか言いたそうにしている、死ぬほどもどかしいまま夜が明けてドトールの朝七時に、コーヒーくさい息でやっと告白された。「まだ二回しか二人で会ってないのに、いきなりこんなこと言い出してびっくりさせるかもしれないけど、おれの気持ちをはかまってるから今言うね。江藤さん、よかったら、おれと付き合ってください」

今日は生まれて初めて男性から告白される気配を感じて私も正直すごくこの瞬間を楽しみにしていた。＜略＞ドトールに入った時点で疲れきっていて、言われたときはうれしいというよりも、やっと終わったという気持ちが先に来た。眠気覚ましに飲んだ徹夜明けのコーヒーが黒くこげて胃にはりついている。(p.38)

「私」と「二」の二回目のデートに「私」は「告白される気配」を感じて出かける。しかし、「二」はあちこち店を連れ回しておしゃべりをするだけで、なかなか告白のことばを発しない。このような状況を「私」は「死ぬほどもどかし」く感じている。そして告白の言葉を「やっ」と聞けたと表現する。つまり、「よかったら、おれとつきあってください」といった類のことばがどのような状況で誰から発せられるのかは予想できるものだということがわかる。別の見方をすれば、たとえもどかしくても「つきあってください」といったことばは催促するものではないらしいことがわかる。また、告白されると通常は「うれしい」感情を抱くはずだということもわかる。

さらには、次の例から、告白という行為は、広辞苑の定義、つまり、相手のことを好きだという心の中に抱いている感情を表明するという行為だけでは不十分であることがわかる。

⁸ 下線は筆者による。

(8) 恋愛のプロセスとしての告白：島本理生『ナラタージュ』

「俺さ、工藤さんのこと好きだよ」

「うん」

その続きを待ったけれど、彼は黙ったまま、腕の力を少しだけ強くした。(p.134)

後ろから抱きしめられたまま「好きだよ」ということばを聞いた「工藤さん」こと「私」はうなずいたあとに「続き」のことばを待っている。初めて二人だけで外出し、その帰りに相手の男性の家に寄った状況では、「好きだよ」ということばだけでは不十分であり、続きを待つ必要があることがわかる。どのようなことばが来てしかるべきであると思っているのかはわからない。

もっとも、告白の儀式に用いられることばにバリエーションは少ないようである。以下に示すように『ナラタージュ』の二回目の告白場面で使われることばは、『勝手にふるえてろ』の告白のことばと全く同じ「つきあってください」である。

(9) 恋愛のプロセスとしての告白：島本理生『ナラタージュ』

「工藤さん」

「うん？」

「俺と付き合ってください」 <略>

「一度は断られてるから、これが最後です。あなたが俺のことを嫌いじゃなくて、だけど特別に好きでもないことは分かってる。それでもかまわないし、前に好きだった相手を忘れなくてもいいんだ。一緒に過ごして楽しかったから。苦しくても、都合の良いことだけ覚えていてみせる。だから俺と付き合ってほしいんだよ。」(p.260)

一方、『花嫁の日』での告白場面は次のようなものである。

(10) 恋愛のプロセスとしての告白：平岩弓枝『花嫁の日』

「由紀ちゃん・・・」

公一が由紀の肩を抱いた。彼の手にも、かすかなおののきがある。

「ずっと好きだった・・・君が好きだったんだよ」(p.37)

「好きだった」という感情表現と抱きしめるという行為だけである。つまり『ナラタージュ』の主人公「私」が何らかの不足を感じた状況である。この違いはどこから生じるのだろうか。このことを考察する前に告白という言葉行為にはどのように対応するのがふさわしいとされているのかを見ていくことにする。

6. 2. 隣接応答ペアとしての告白

『勝手にふるえてろ』では「ニ彼」が主人公「江藤さん」に告白の返事を求める場面がある。時系列に示すと次の①から③のようになっている。

(11) 隣接応答ペアとしての告白：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

①「江藤さん、よかったら、おれと付き合ってください」(p.38)

②「あのさ。そろそろ告白の返事聞かせてよ。あれからもうだいぶ経っただろ」(p.60)

③「なあ、いい加減返事を聞かせてよ。おれと付き合う気があるのか、無いのか」(p.105)

①は前述した二回目のデートでの告白場面である。②は「だいぶ経った」デートの帰り道、③は主人公がニの家遊びに来た時点である。それぞれの場面で「ニ」は主人公に「つきあう」ことへの返事を求めている。

何度も会っているにもかかわらず、なぜ「返事」が必要なのだろうか。

ともに外食をしたり自宅で過ごしたりすることは「つきあう」こととは違うのだろうか。返事を再三要求するということは、「つきあってください」ということばを発した者と受け取った者が時間を共有する活動を重ねるだけでは不十分であるということを示している。言語的に応答することが求められているようである。ということは、告白と応答というのは隣接応答ペアの一つだと認識されていると考えたと説明がつく。

隣接応答ペアとは会話に潜在する規則性で次のような特徴を持つ。

Two utterance length

Adjacent positioning of component utterances

Different speakers producing each utterance

Relative ordering of parts (i.e., first pair parts precede second pair parts)

Discriminative relations (i.e., the pair type of which a first pair part is a member is relevant to the selection among second pair parts)

(Schegloff & Sacks 1973: 295-6)

質問と答え、あいさつとあいさつ、申し出と受諾/拒否のペアにその特徴の典型が見て取れる。別々の話者から発せられた二つの発話から成立し、その二つの発話は第一部に引き続き、第二部が発せられる。第一部が質問だとすると第二部はその質問にたいする答えが発せられる、というように第一部によって第二部になりうる発話の範囲が限定される特徴を持つ。それゆえ、第二部に予期される類の応答が発せられないときは、その不在が意味を持って明白に浮かび上がってくる。

ただし、次のレヴィンソン (1990: 378) の例が示すように、すべてのペアにおいて第一部の直後に第二部が続くわけではない。

(12) B : U:hm(.) what's the price now eh with V. A. T. do you know eh

(えーと、いまヴァットはいくら) 《Q1》

A : Er I'll just work that out for you=

(計算してみますから) 《HOLD》《保留》

B : thanks (ありがとう) 《ACCEPT》《受諾》

A : Three pounds nineteen a tube sir. 《A1》

(1本3ポンド19です)

上記の例では問い(Q1)に対する答えが後続せず、保留とその受諾が挟み込まれる挿入連鎖が生じたのちに、問いへの答え(A1)が発せられている。

『勝手にふるえてろ』では(7)の告白の直後、(12)の例と同じように保留とその受諾が行われる。

(13) 隣接応答ペアとしての告白：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「ありがとう。よく考えてみます」《HOLD》《保留》

「もちろん。ゆっくり考えて」《ACCEPT》《受諾》(p.38)

告白と応答という隣接応答ペアの第二部である応答が先延ばしにされているという理解が成立する。そこで「二」は先延ばしされている第二部を求めて、(11)の②や③のように催促をしているのであろう。

『勝手にふるえてろ』では(11)の③のあとに(14)に示すような答えを、『ナラタージュ』では(9)のあとに(15)に示すような答えを、それぞれ得ている。

(14) 隣接応答ペアとしての告白：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「いいよ」

「え」

「私たち付き合おうよ」

「まじで? やった」(p.107)

(15) 隣接応答ペアとしての告白: 島本理生『ナラタージュ』

「私、小野君と付き合う」

彼がこちらを見た。私も彼のほうを強く見た。

「本気で言ってる?」

「うん」

「いいの?」

「うん。私も小野君と一緒にいてすごく楽しかったから」

(p.260-1)

おもしろいことにいずれの場合も、付き合うことに応じる返事をもらった男性は「まじで?」や「本気で言っている?」といった発言をし、返事の真意を聞いている。

一方、『花嫁の日』では(10)のような「ずっと好きだった」という公一の言葉を受けた由紀からの明確な回答は出てこない。それにもかかわらず、双方に不足感はないようである。その後、「君を早くお嫁さんにしたい」「あたしも、早くお嫁さんになりたい」といった展開になる。

6. 3. 告白のタイミング

明確な「つきあってください」ということばを求め、それへの明確な回答を要求する恋愛、しかも受諾の返答を受け取りながらもその真意を問うような恋愛とそうではない恋愛、その違いはどこから生じているのだろうか。告白のタイミングという観点から検討する。

以下に示す(16)は、告白への応答を求める最初の催促つまり(11)の②の直後に「二」から発せられたものである。

(16) 告白のタイミング: 綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「おれは嘘つくのがきらいだから正直に言うけど、江藤さんがおれの
ことどう思ってるかだいたい分かるんだ。付き合うほどは好きに
なれないって思ってるんだろう。それならいっそもう、早く教えて
ほしい。これがおれの正直な気持ち」(p.61)

次に示すのは(8)の告白の直後に発せられたものである。

(17) 告白のタイミング：島本理生『ナラタージュ』

「工藤さんは俺のこと、べつにそこまで好きじゃないだろうなって
分かってたけど、やっぱり」(p.134-5)

すでに(9)でも示したとおり、二回目の告白の時も(17)と同様の趣旨の
発言をしている。

上記(16)と(17)および(9)に共通するのは、相手の女性が自分のこ
とを「嫌いではないけれど、たいして好きではない」と思っている段階
で告白を行っているということである。相手の気持ちが自分に向いてい
るかどうか自信を持てない段階で告白をしている。そのため、是が非で
も明確なことばによる返答を求めているのであろう。しかも、肯定の答
えを希望はしても予想することはできない段階であるので、聞き返すこ
とによってその真意の再確認を行っているのだろう⁹。

また、次のやり取りからは、告白が結婚と結びつくものではないこと
がわかる。

(18) 告白のタイミング：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「おれは付き合っても、すぐには結婚しないから」(p.108)

⁹ 「まじで？」や「本気で言っている？」は機能としては実質的な質問というよりは、喜びや照れの表現であるかもしれない。しかし、ここでは告白にたいする受諾の返事を受け取った直後に、その真意を問うような質問形式の発話が行われた、という形式に注目している。

「私だって付き合っただけの、よく知らないうちから結婚したいなんて思ってないよ」(p.109)

付き合うことを了承した主人公も相手のことを十分に知って了承したわけではない。

このような状況は、以下に示す『花嫁の日』の場合とは異なる。

(19) 告白のタイミング：平岩弓枝『花嫁の日』

「僕が阿紀さんをなんとも思っていないのと同様に、阿紀さんだって僕をなんとも思っただけじゃないよ。男と女ってのは、愛したり、愛されたりは口でいわなくとも、本能的にわかるものなんだ」

￥自信たっぷりな公一に、由紀はいたずらっぽい眼をみせた。

(p.44)

(10) の告白後、(19) で示したように、公一は誰が誰を愛しているかどうかはわかるものであると明言している。相手の気持ちがわかって告白しているのだから、明確な返事を求める必要がない。

本章では、2000年代の恋愛は、告白と返答の隣接応答ペアが完結することを是が非でも求めるような儀式性を帯びたものであることを見てきた。誰がどのような状況でどのようなことばを発するのかは予期可能であり、依頼の形をとる告白は答えを必要とするものである。明確な答えを要求しない1970年代の告白とは形式が異なる。儀式性を重んじるのは、相手の気持ちが自分に向いているという自信を持つことができないことが一つの要因として考えられる。それと同時に1970年代と2000年代の恋愛を取り巻く環境の変化が反映しているのではないかと考えられる。1970年代は草柳（2011: 59）が指摘するように「皆婚社会で、なおかつ恋愛結婚が大多数、ということは当然、大多数の人が恋愛することを意味する」時代であった。「誰もがそれなりの年齢になれば結婚する」（草

柳2011: 58) のであるから、愛の告白をすることは結婚と結びつく行為となる。また、愛・結婚・性の三位一体が生きていた時代でもあった。よって、『花嫁の日』の場合、明確な回答はないものの、抱きしめられることを拒否しないという行為そのものが告白の受諾を意味していたのだろう。一方、2000年代は、結婚も恋愛も「したければすればよいし、しないからといって困ったことになるわけでもない」（草柳 2011: 64）時代である。恋愛と結婚が直結していた時代とは異なり、特定の人と親密な関係性を築きたいと思うかどうかはいちいち確かめる必要が出てくる。佐藤（2010: 109）でも言及しているように、2000年代の恋愛小説の中ではセックスが目的でも手段でもなくなっている。愛・結婚・性の三位一体が崩れている。どういう関係性をもってして恋愛関係といえるのか、その指標が見えにくくなっている。そのような時代だからこそ、自分たちの関係性を明確にするためのことが求められていると考えられる。

7. 名前の持つ意味

本章では、告白受諾後に話題になる「下の名前」を呼ぶこと、呼んでほしいと頼むことの意味、名前の呼び方の変化と双方の関係性の変化、そして名前のないままに進行する恋愛とその関係性について考察する。

7. 1. 「下の名前」で呼ぶこと

儀式を重んじる様子は告白後にも見受けられる。『勝手にふるえてろ』では(14)の直後、つまり告白を受諾してもらった直後、「ニ」は以下に示すように、それまで「江藤さん」と呼んでいた呼び方を「下の名前」である「ヨシカ」に変えてもいいかどうかと尋ねている。

(20) 下の名前：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「江藤さん、下の名前で呼んでもいい？」

「いいよ」

「……じゃ、ヨシカ」(p.111)

『ナラタージュ』でも告白受諾の(15)の直後、双方の名前の呼び方にかんする話題が出てくる。

(21) 下の名前: 島本理生『ナラタージュ』

おやすみ、と告げた後にじっと電話を切らずに無言が続いたので

「どうしたの」

「そっちから切って」

俺からは切れない、と笑った。その言葉に私も笑って

「そんなことを言われたら、こっちも切れないよ」

「じゃあ俺のこと、名前で呼んでくれたら切る」

「名前？」

ごめん、とこちらの返事を待たずに彼は苦笑した。

「なんでもない。おやすみ。明日また電話する」

と告げて小野君の電話は切れた。(p.265-6)

なぜ、「二」も「小野君」も名前にこだわるのだろうか。名前にはどのような力があるのだろうか。

お互いをどのように呼ぶのかということは、お互いの関係性を示す指標となりえる (cf. 鈴木 1973; 田窪 1997; McConnell-Ginet 2003)。通常、対等な人間関係の場合、相互性のある呼び方が行われる。苗字に敬称をつけた「工藤さん」にたいしてやはり同じく苗字に敬称をつけた「小野君」、あるいは下の名前の「玲二」にたいして同じように下の名前の「泉」と呼ぶ、といった具合である。

ところが、『勝手にふるえてろ』、『ナラタージュ』いずれの場合も相互的な名前の呼び方が成立していない。(20) に示したように、「二」は

下の名前で相手を呼ぶ許可を得て、「ヨシカ」と主人公のことを読んでいる。しかし、主人公は相手に向かって名前呼びかけをしないのはもちろんのこと、(22)に示すように地の文では「ニ」と表現し続けている。

(22) 非相互的な名前：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

私を抱くニの腕に力がこもり、彼の高揚が伝わってくるのが、ぼんやりとうれしい。「それにしても来留美さんにいろいろ教えてもらってたのに、おれは肝心なところでいつも焦って、ヨシカを困らせてばかりだったな」(p.113)

『ナラタージュ』の場合も(23)に示すように、男性側は相手を「泉」と下の名前で呼んでいるのにたいして、「泉」は相手のことを苗字に敬称をつけた「小野君」という付き合う前から使っていた呼び方をそのまま使い続けている。

(23) 非相互的な名前：島本理生『ナラタージュ』

「なにかを教える仕事は向いていると思うよ。小野君には練習のときにもだいぶお世話になったし」

「だけど泉に教えるのは緊張していたから、あんまり上手くできなかった気がする」(p.270)

そして、この「小野君」という呼び方が先に(6)(以下再掲)で示したように、親しさを表さない指標として問題になる。

(6) 名前に不安のある恋愛：島本理生『ナラタージュ』

「その呼び方、もうやめろよ。三ヵ月付き合って小野君はないだろう。本当は俺のことなんか好きじゃないくせに困ったときだけ俺に頼るなよ」(p.324)

『ナラタージュ』の二人はこの後別れることになるが、「小野君」と呼び続けた主人公「泉」は小野君のことが好きであったと言っている。

(24) 名前に不安のある恋愛：島本理生『ナラタージュ』

「彼は最後までそれを信じていなかったし、それは私のせいです。けど私はたしかに彼のことが好きでした」(p.357)

下の名前を読んだから相手に愛情がある、呼ばないから愛情がない、というわけではない。しかし、愛情という形のないものを問題にすると、ことばという手段に依存しことばを通じて見えざるものを確認しようとしている様子が浮かび上がる。まさに、名前の呼び方にかんするイデオロギーといえるだろう。

名前の呼び方にかんするイデオロギーあるいは人間関係の結び方にかんするイデオロギー、この場合は下の名前で呼び合うことが恋人同士の証である、が問題化されることはめったにない (Verschuieren 2012)。現に、(20) で示したように、『勝手にふるえてろ』の場合、ヨシカと呼んでもいいかと尋ねられて、「どうして」といった反応は出てこない。すぐに「いいよ」と答えている。『ナラタージュ』では、(21)で示したように下の名前を呼んでくれという要請にすぐに応答はできない。が、「そうやって一つ一つ形作っていくのだなあ」(p.266)と相手の発言を振り返っている。

イデオロギーは内面化し規範となっているだけに、めったに明確なことばになることはない。その考え方が揺さぶりをかけられる場面に遭遇しても、相手が自分とは異なる考え方をしているのかもしれない、という発想に至らせない力も持つ。むしろ、揺さぶりをかけられると、(6)に示したように自分が内面化している考え方を全面に出して相手を詰問する力を発揮させるものである。

名前を呼んでいない側もイデオロギーに逆らおうあるいはイデオロギ

一を転覆させてやろうとしているわけではない。通常とは異なるふるまいをすることで、通常の恋愛関係で想定されている関係性に違和感を抱いていることを提示している。揺さぶりをかけているほうも非相互的な名前の呼び方をすることによって、下の名前で呼び合うことが恋人同士の証であるというイデオロギーを利用している。

7. 2. 名前のない恋愛から名前のある恋愛へ

『勝手にふるえてろ』で「二」の名前が出てくるのは物語の最後である。

(25) 名前のある恋愛へ：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

「絶対にうまくやる、絶対にうまくやるから、これからも愛して」
肩のところが濡れて背広の色が変わっている霧島くんに抱きついた。

「霧島くん、ねえ、怒ってるの」

「いや。ほっとしてる」(p.162)

「二」と向き合うことを主人公が表明している場面である。このとき初めて相手の名前を呼んでいる。この場合、下の名前を呼ばないことは問題とはならない。呼びかけのなかった段階から呼びかけの段階への変化であることが重要である。相手と真正面からぶつかっていくことを表明した段階ではじめて相手の名前が出てきている。名前を呼ぶということが相手とまっすぐに向き合うことと結びついている。

7. 3. 名前のないままの恋愛

一方で、名前のないままの恋愛もある。以下に示すのは『星へ落ちる』で「彼」が主人公の「私」に「結婚しよう」という場面である。

(26) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

「ねえ、結婚しようよ」

映画を観ながら、彼が言う。ワイルドターキーを飲み過ぎている彼の言葉を信用せずに笑って、いつする？と聞く。

「俺はいつでもいいよ」(p.174)

結婚を申し込むような場面でもお互いの名前が出てこない。「彼」は「彼」のままである。

このような名前のないままの関係性は、名前のない恋愛から名前のある恋愛へと変化する『勝手にふるえてろ』の場合とは異なる。以下は(26)の直後の主人公の内面描写である。

(27) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

本当に幸せな時間で、その時間の終焉が怖くて仕方ない。少しでも長くその時間が続くように、私は意図的に仕事の話を避け、彼のワイルドターキーを水で薄めた。＜略＞本気で言っていたのだろうか。＜略＞彼は本当に、私を愛しているのだろうか。(p. 175)

結婚しようと言われたことがうれしく幸せに思いながらも、それでも不安を抱いている。その不安の根拠は「彼」と「彼」が同棲していた男性との関係性にある。

(28) 名前のない恋愛：金原ひとみ『星へ落ちる』

彼らは私の話をしたりして、笑ったりしてるんじゃないだろうか。ばしゃばしゃと顔にお湯を受けながら気づく。いつの間にかあのひとと私の立場が逆転している事に。私と彼の関係が浮気だった頃は、あの人が私の影に怯えていたのに彼があの人を去ってからは、私があの人影に怯えている。(p.176)

「彼」が別の人（「あの人」）と暮らしていた時には、「あの人」が主人公の「影に怯え」ていた。しかし、「彼」が主人公と暮らし始めたことによって怯える側と怯えられる側の関係性が逆転している。『勝手にふるえてろ』とは異なり、相手に対して自分の不安な思いをぶついたりしない。不安を一人で抱えたままである。

(25) に示したように、うまくやるから愛してほしい、と自分の気持ちを相手にぶつけていく関係性は名前のある関係性へと変化し、相手に思いをぶつけることなく、自らの心の中に不安を抱えたままの関係性は名前のないままである。

固有名詞というのは特定の誰かを指し示す以上の役割を果たす (McConnell-Ginet 2003)。日本語においては、文法的に必須要素ではない。なくてもすまずことができる分だけ、存在することの意味はそれだけ大きくなる。

常識に揺さぶりをかけていたヨシカは常識の中に収まりそうな気配を示唆して物語は終結する。一方で、揺さぶったままの名前のない恋愛は不安定な状態のまま物語が終結している。

8. まとめ

本稿は、恋愛小説がtrue loveを希求する物語であるという前提への違和感を端緒に、名前のない恋愛のありかたを考察してきた。恋愛が唯一無二の相手との関係性を紡ぐために全人格を投入することだとしたら、本稿で考察してきた2000年代の恋愛小説にはそのような要素が欠けていると言わざるを得ない。たしかに、「結婚」ということが物語の中に登場することはする。しかしそれは『花嫁の日』に描かれていて、草柳（2004）が論じているような一人の異性にすべてを捧げることが女性の幸福であるという「強い恋愛」とは異なる。不安定で希薄な関係性である。草柳（2004）は現代的な恋愛を「緩やかな恋愛」と名付けたが、相手をどのように呼び表すのかに注目してみるとことによって本稿ではその

実体をより鮮明にすることができた。

まずは2000年代の恋愛小説の中では登場人物に名前が与えられていない場合があることに注目した。名前を与えられていないあるいは名前を呼ばれない登場人物は形式を重視する。「つきあってください」という告白を行いそれにたいする回答を求める。受諾の回答を得ると、下の名前を呼ぶことにこだわる。下の名前を呼び合うことが親しさの指標であり、恋人であれば親しい関係であるのだから下の名前でお互い呼び合う、という名前イデオロギーが当然の顔をして浮上する。この名前イデオロギーは相互性を要求する。お互いがお互いを下の名前と呼ぶ、という相互性である。ところが物語では相互性が確立していない。なぜ相互性が確立しないのか。それを愛情の欠如、あるいは相手と全面的に関与することへのためらいと結びつける。非相互的な関係性は、恋愛関係の解消へと至る場合と相互的な関係性を目指しての変化へと至る場合がある。後者の場合、相手に向き合っていこうとする姿勢を示すとき、相手の名前を始めて口にする。相互的な関係性へと一歩を踏み出す。

本稿では名前を持たないままの関係性も考察した。谷本（2008）は最近の恋愛を「二人自閉」関係だと分析しているが、名前を持たない恋愛は、「二人自閉」どころか、不安な気持ちを相手にぶつけることなく一人で悶々とかかえたままの「一人自閉」な恋愛であった。そのような関係であっても結婚を口にする。それを恋愛というのかどうかかわからないが、なにを恋愛と定義するかはその時代の文化や社会が規定するのだとしたら、これもまた一つの恋愛の形だといえるのだろう。

そうなると、2000年代的恋人関係とはどういうものか、という問題が浮上してくる。おそらく告白とその受諾という儀式を通過した二人の関係なのだろう、ということが本稿の考察から浮かび上がってくる。Kövecses（1988）にあるような感情のリミットを越えて相手を思いあうといった関係性ではない。一種の契約関係である。上野（1998）は人々が恋愛病にかかっていると述べている。たしかに恋愛にかんする言説が

あふれている。しかし、どのように人と人が関わり合い、関係性を紡いでいくのかには変化が見て取れる。恋愛と結婚とセックスの三位一体が神話化した現代、何をもってして恋人関係というのかが見えにくい。だからこそ形が必要になる。ことばを媒介とした形への依存度が増している。本稿で考察した名前のない恋愛、名前のない恋愛から名前のある恋愛への変化、そして名前のないままの恋愛は、名前イデオロギーが人間関係調整の指針として利用価値の高い言語資源であることを示している。

*本稿は次の2つの講座の内容に加筆、修正したものである：1) 横浜市立大学エクステンション講座『恋愛小説に見る人間関係の紡ぎ方』(2011年10月1日)、2) 鎌倉市生涯学習センター講座『メディアがつくる「ことば」考』(2012年3月3日)。

参考文献

- 上野千鶴子 (1998) 『発情装置：エロスのシナリオ』 筑摩書房.
- 尾崎俊介 (2008a) 「後ろめたい読書：女性向けロマンス小説をめぐる『負の連鎖』について」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』 57: 117-122 愛知教育大学.
- 尾崎俊介 (2008b) 「ハーレクイン対シルエット：『ロマンス戦争』の行方」『外国語研究』 41: 39-65 愛知教育大学英語研究室.
- 金原ひとみ (2011) 『星へ落ちる』 集英社文庫 (初出2007年).
- 草柳千早 (2004) 『「曖昧な生きづらさ」と社会：クレーム申し立ての社会学』 世界思想社.
- 草柳千早 (2011) 『＜脱・恋愛＞論：「純愛」「モテ」を越えて』 平凡社新書.
- 佐藤響子 (2010) 「恋愛小説：ことばでつくる親密な関係性」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』 pp.107-121 世界思想社.

佐藤響子 (2011) 「父親が使う自称詞：なぜそこでそれが選択されるのか」『横浜市立大学論叢人文科学系列』62 (2) : 1-23.

島本理生 (2008) 『ナラタージュ』角川文庫 (初出2005年).

真銅正宏 (2007) 『小説の方法：ポストモダン文学講義』萌書房.

新村出 (2008) 『広辞苑 第六版』岩波書店.

鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店.

島清恋愛文学賞 Retrieved 15 September 2012, from

<http://www.city.hakusan.ishikawa.jp/kyouiku/bunka/simase/bunka5-2.jsp>.

田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」田窪行則編『視点と言語行動』pp.13-44 くろしお出版.

谷本奈穂 (2008) 『恋愛の社会学：「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.

『ダ・ヴィンチ 1月号』 (2010) メディアファクトリー.

『ダ・ヴィンチ 1月号』 (2011) メディアファクトリー.

『2006年版この恋愛小説がすごい!』宝島社.

日本ラブストーリー大賞 Retrieved 30 August 30 2011, from

<http://japanlovestory.jp/>

ノッター、デビッド (2007) 『純潔の近代：近代家族と親密性の比較社会学』慶応義塾大学出版会.

平岩弓枝 (1982) 『花嫁の日』講談社文庫 (初出1971年).

マイカルス・アダチ, アイリーン・B. (2010) 「恋愛小説における日本的なロマン：ハッピーエンドとは何か」『比較日本学教育研究センター研究年報』6: 129-138, お茶の水女子大学.

森永卓郎 (1997) 『＜非婚＞のすすめ』講談社現代新書.

レヴィンソン, スティーヴンC. (安井稔・奥田夏子訳) (1990) 『英語語用論』研究社.

綿矢りさ (2010) 『勝手にふるえてろ』文藝春秋社.

Eckert, Penelope and McConnell-Ginet, Sally (2003) *Language and*

- Gender*. New York: Cambridge University Press.
- Fairclough, Norman (1992) *Discourse and Social Change*. London: Polity Press.
- Giddens, Anthony (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*. London: Polity Press.
- Halliday, Michael, A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Hodder Arnold.
- Harlequin Writing Guideline. Retrieved 1 March 2012, from <http://www.harlequin.com/store.html>.
- Kövecses, Zoltán (1988) *The Language of Love: The Semantics of Passion in Conversational English*. Lewisburg: Bucknell University Press/London & Toronto: Associated University Presses.
- McConnell-Ginet, Sally (2003) “What’s in a Name?” : Social Labeling and Gender Practices. In Janet Holmes and Miriam Meyerhoff eds. *The Handbook of Language and Gender*. pp. 69-97. Oxford: Blackwell.
- Radway, Janice A. (1991) *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature (With a New Introduction by the Author)* . London: The University of North Carolina Press.
- Romance Writers of America The Romance Genre. Retrieved 1 March 2012, from <http://www.raw.org/>.
- Schegloff, Emanuel A. and Sacks, Harvey (1973) Opening up Closing. *Semiotica* 8: 289-327.
- Shibamoto-Smith, Janet (1999) From *Hiren* to *Happi-endo*: Romantic Expression in the Japanese Love Story. In Gary B. Palmer and Debra J. Occhi eds. *Languages of Sentiment*. pp.131-150. Amsterdam:John Benjamins Publishing Company.
- Shibamoto-Smith, Janet (2004) Language and Gender in the (Hetero) Romance: “Reading” the Ideal Hero/ine through Lovers’ Dialogue in

Japanese Romance Fiction. In Shigeko Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith eds. *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Model and Real People*. pp.113-130. New York: Oxford University Press.

Talbot, Mary M. (1995) *Fiction at Work*. London: Longman.

Talbot, Mary M. (1997) 'An Explosion Deep Inside Her': Women's Desire and Popular Romance Fiction. In Keith Harvey and Celia Shalom eds. *Language and Desire: Encoding Sex, Romance, and Intimacy*. pp.106-122. New York: Routledge.

Verschueren, Jef (2012) *Ideology in Language Use*. New York: Cambridge University Press.